ほぼろを売る

安芸　遥

春らしい日差しが窓辺にあふれていた。ベランダに出ると、周囲に広がる田圃の畦道にいつのまにか草の新芽が伸びていて、陽光を浴びた緑が生き生きと眩しかった。

香代は去年秋から、以前は考えたこともなかったケアハウス住まいになっている。間もなく八十五歳の誕生日がくる。人生の終焉の場がこんな形になったことで、落ち込んだり一面ほっとしたり、複雑な気持ちでこの半年を過ごしたのだった。

しかしようやく、このハウスでの生活に楽しみも見つけられるようになってきた。

わずかな洗濯物を干したあと、ほっと一息ついた香代は、新芽に気持ちをそそられて、久しぶりに散歩に出かけたくなった。骨粗鬆症を病みその容態も進んでいるが、部屋に閉じこもらないよう、できるだけ動くようにしている。脆弱な骨を守るには転倒は絶対に避けなければならないので、ここ一年ほどは内でも外でもシルバーカーを頼りにしている。

ここは広島市郊外で、ビルやマンションが林立し始めてはいるが、山陽道を下りて国道から少し入ったこの辺りには、まだ田圃が残っており、ケアハウス「しおん」は田圃の真ん中にぽつんと、薄茶色のコンクリートの肌を見せて立っている。五階建で、一階に事務所とデイサービスの施設がある。二階に居住者の食堂と娯楽室、それに浴場。三階から五階部分が三十人分の個室住居である。個室は、それぞれにバリアフリーの行き届いたバス・トイレつきで、流しや冷蔵庫、洗濯機など一応の生活調度品は備わっている。アパートの独り住まいと同じで、ときどき二階の浴場にでかけ、泡風呂で温泉気分に浸ったりする。

香代は週二日のデイサービスを受けており、その日は一階に降りて、外部の人たちとの交流もある。去年の忘年会のときだった。香代は、かつて婦人会の趣味の集いで習った詩吟や大正琴の演奏を披露した。それがきっかけになり、大正琴を演奏（や）ってみたいと、二人の女性入居者が、香代の部屋にきて遊びがてら弾いていた。希望者がだんだん増えたので、今年初め、施設長はじめ職員のサポートを受け、「しおん大正琴同好会」が誕生した。

今は七名になり、週二回午前中の稽古日まで決まった。唱歌を中心とした教則本と大正琴を各自が求め練習を始めている。琴の音階ボタン（ピアノの鍵盤のように白と黒のボタン）の番号を譜面の番号どおり左手で押さえ、同時に右端の弦（五本）を右手に持ったピ

ックで弾く。高齢者には、リズムを取るのがなかなか難しいらしい。歌いながら弾いているのを見るのが、いちばん分かり易いとの要望で、香代は我流ながら歌って弾いて見せることにしている。演奏の善し悪しを云々する者はなく、みんなで楽しむのが目当てなので、「習うより慣れろ」に徹して練習を重ねた。『さくらさくら』『春の小川』『荒城の月』は、誰もが慣れ親しんだ曲だから、今はもうぴったり息があった演奏ができるようになってきた。職員たちから、「しおん」を明るくするいい雰囲気が生まれたと褒められ、香代たちは疾うに忘れていた達成感を喜び合った。それに勢いを得て、メンバーの中の黒一点の提案で、こんどは『黒田節』と『白雲の城』に挑戦しようと、譜面を取り寄せてみんな意欲満々である。そんなことから、萎みきった風船玉みたいだった香代の胸に、息が吹き込まれてどんどん膨らみ始めていた。そんな矢先、今朝の陽光と新芽たちが手招きでもするように香代の気持ちをそそったのである。さっそく鍵とハンカチをシルバーカーのポケットに入れて部屋を出た。

香代の部屋は、四階の西の端で、すぐ隣がエレベーターになっている。一階でエレベーターを出て、共同玄関脇でシルバーカーと履物を外用に取り替えた。バリアフリーが完備しているし、エレベーターの乗り降りにもすっかり慣れたので、家にいたころに比べるとずっと出かけやすい。

外の空気は暖かく柔らかだった。ハウスの周りには、散歩にちょうどよい農道が何本もうねっている。しばらくして、急に胸をくすぐる匂いに気づいた。そこには柔らかな蓬の芽がいっぱいだったのである。香代はその畦道にそろりと腰を下ろした。柔らかい蓬の一葉を摘んで、手で少し揉んでみる。いい匂いがした。ひょいと田圃に目をやると、稲の古株から伸びたあえかな蘖（ひこばえ）の緑が、光を透かしてひとしおやさしい。足下の溝に沿って視線を延ばすと、香ってきそうな生きのいい芹が叢っている。彼女は、やっぱり春はいいねえ、と呟いた。

香代は、県中央部の山村に生まれ育ち、嫁ぎ先も同じ村内だった。子どものころから、月遅れの雛祭りには、蓬を摘んで菱餅や霰の一色（ひといろ）に、芹は巻きずしの具の青みに使っていた。草摘みは村の女や子どもたちの早春の仕事であり、楽しみの一つでもあった。

春になると、「ほぼろ」と竹べらを持って草摘みをする女や子どもたちが、川土手や畦道のあちこちにしゃがんでいた。ほぼろは、竹ひごで編んだ籠で、ざるよりも縦長で深さがあり大きさもさまざまある。早春の蓬や芹摘みに始まり土筆や蕨取り、夏には茶摘みや梅もぎ、秋には柿もぎや松茸狩りと、どこの家でも愛用している。布で編んだ紐の持ち手が

付いていて、手にぶら下げたり肩に掛けたりして使っていた。
香代は生き生きした蓬や芹を見ているうちに、胸の中の風船がますます膨らんできて、面白い話があるんよ、と、思わず新芽たちに話しかけていた。去年の夏、東京から墓参に帰った妹の話を思い出したのだ。二十近くも年の離れた末っ子の彼女はまだ元気で、「ほぼろ」について大発見したと実家に集まった弟妹や姪たちを前に賑やかに語ったのだった。香代はその時のことを思い出して急に吹き出しながら、まあまあ聞いみて、と、またしても新芽たちに呼びかけた。

それは去年の夏のことじゃった。月遅れの盆に、里の墓参りでみんな集うたときのことよ。末の妹が突然、「ほぼろを売る」って知ってる？　と嬉しそうに話し出してのう。その場にいた者(もん)はみんな、知っとるよ、と、当然のような顔つきで、あんまり興味はもたんかった。姪の一人が「お嫁さんが里へ逃げ帰ることじゃろう？　今ごろはめったに聞かんよ」と、つまらなそうに言うたんよ。そしたら妹が身を乗り出して、「お嫁さんのその行動が、なしてほぼろを売ることになるんよ」と口を尖らせたんよ。みんな、ああそりゃ分からんねえ、と顔を見合わせとった。妹は、それみんさい、と言わんばかっりに、にんまりして話し始めたんよ。それは、妹が七、八つのころ、近所の若夫婦の話を小耳に挟んだ時のことから始まったんじゃ。わたしは妹のように、声色まで使(つこ)うては話せんがのう、まあ聞いてみてよ。

—あそこの家は、姑さんがイビセエ（怖い）人じゃけんのう。
—嫁さんもガンボ（意地悪）じゃげなよ。
—どっちもどっちじゃのう。
—とうとう、嫁さんがほぼろを売ったったんよの。

この話を聞いた妹は、とっさにいいこと聞いた、と飛んで家に帰って母に言うたんじゃそうな。
「お母さん、この古いほぼろを売って新しいのを買うけん、なんぼで売れるかの？」と。
母はたまげた顔をして、誰が古いほぼろを買(こ)うてくれるんじゃ、そがあな者(もん)はどっこにもおらんよ、と大笑いしたそうじゃ。それでも妹は、どこぞの嫁さんがほぼろを売ったった言うて聞いたんよ、と得意げに話したらしい。こんどは母が真剣な顔で、大人の話(はなし)う聞く

もんじゃない！　ほぼろ売りが来たら買うてやるけん、言うて酷う怒ったそうじゃ。それから二、三年して、妹も「ほぼろを売る」言うんは、嫁が里へ逃げ帰ることじゃと分かるようになったそうな。でも、なしてその嫁の行動を「ほぼろを売る」言うんか、その語源は誰に聞いても相手にされんか、怒られるのが関の山じゃったげな。もちろん、わたしも知らなんだ。語源なんか知らんでも、みんな納得づくで使うとった。そのうち妹もその拘りを忘れ、都会に出て半世紀も経ってしもうて。ところが近頃になって、春が来るとこの田舎の風景が懐かしゅう思い出され、またその語源が気になりだしたんじゃと。とうとう図書館へ行って調べたらしい。何でも「広島県大百科事典」とかいう立派な本に、ちゃんと載っとったそうな。それはざっとこんなことじゃった。

―ほぼろの縁をかがるのに四目行って竹しべを返すから「ヨメいってかえる」のしゃれから生まれた言葉。大家族時代、嫁姑の不仲から嫁がほぼろを提げて草摘みのふりをして、実家へ逃げ帰ることを、広島一帯で「ほぼろを売る」と使われた―

妹は、半世紀ぶりの快挙の気分じゃったと大袈裟に言うて、ほんま誇らしげに楽しそうじゃった。定年になってから読んだり書いたりの趣味を始めて、昔をたぐり寄せたらしいんよ。それにしても、何げのう使うとった言葉が、ひょんなことから生まれたその土地ならではの言葉じゃ言うて、いっときみんな感心し、妹は子どものようにしたり顔じゃったその折りに、妹はこんなことも言うとった。田舎にいたときは、山も草木も空気と同（おんな）じでたいして気にも留めなんだけど、最近は郊外の野や山に、草木の新芽や秋のもみじを観にわざわざ出かけるようになったと。妹が生まれ故郷の風景を懐かしがるんが、わたしも今はよう分かる気がしてのう。この辺りには、もう新しい家を建ててもらいとうない思うんよ。田圃の真ん中に立っとるハウスにいる者（もん）が言うては、我儘で相済まんことじゃが、こんだけの自然が残っとるんは有難いことじゃけん。

ほんまに、今朝は久しぶりに晴れ晴れしたいい気持ちになれた、ありがとう。ありゃ、もうこんな時間になってしもうたわ。

香代は新芽との昔語りに、いっとき時間を忘れていた。ひょいと時計を見ると、はや十一時近い。ハウスの昼食は十一時半からだ。香代はやおら立ち上がった。何だか肩も軽くなり、胸も解き放たれた心地がする。青々した新芽たちに励まされたのか、快い清流が音

を立てて体中を流れているような気さえした。また来るね、ありがとう、と、新芽たちに挨拶してゆっくり歩き始めた。

玄関のところで、ケアマネージャーの田中さんが、

「暖かくなりましたね。お顔の色もいいわ」

と、笑顔で近づいて声を掛けてきた。

「畦道が懐かしゅうて、草摘みでもしたいような」

香代は笑いながら応えた。

「まあ、高いきれいな声。笑い声も大きゅうなって、顔もふっくらしちゃったみたい」

彼女の声も、いつもより明るく響いてくる。香代は、ありがとう、と言ってからまた声を上げて笑った。

「お昼、急がれないで。そろそろでいいんですよ」

香代は田中さんの気遣いの言葉を背に、エレベーターに入って行った。

去年の夏、初めてここを見学に来たときには、思うように話もできなかった。あの嫁に監視されその言動に怯えきっていたので、下を向いてぼそぼそと話すものだから、付き添ってきた妹が、しっかりするのよ、と叱ったほどだった。あの生き地獄のことは、できるならもう忘れたい、そう思いながら香代はゆっくりと食堂に入って行った。

食堂は広く、テーブルが三卓ずつ三列に並んでいるが、車椅子もシルバーカーも何の障りもなく通れるようにゆったりしている。ほとんどが二人ずつ向かい合って、四人で一つのテーブルを囲むのだが、一卓に膳が八つは並ぶ広さがある。時分どきになると、施設長をはじめケアマネージャーやヘルパー、事務職まで総動員で厨房前から、それぞれのテーブルに配膳が始まる。粥食や細かく刻んだ総菜など特別食の人もいるから、厨房の栄養士と声を掛け合って一人ひとりに間違いなく配膳される。

はや今日は全員が揃って、殆どのテーブルで食事が始まっていて、職員がテーブルの横で腰を屈めて、話しかけたり調味料の世話をしたりしていた。

「遅うなってごめんなさい」

香代は入り口でみんなに声を掛け、自分の席に近づきながら、お待たせしてごめんなさいねえ、とテーブルのメンバーに改めて謝った。テーブルごとにできるだけ揃ってから、箸を取るようにしているのだ。シルバーカーを脇に片寄せ、ゆっくりと椅子に腰掛けると同時ぐらいに、施設長が、

「宮田さん、珍しく遅かったですね。どこか調子が悪いところでも?」

と、香代の前に膳を置きながら、顔を覗き込むようにした。香代はにこにことかぶりをふって、

「暖こうなって、あんまり緑が生き生き見えたもんで、つい誘われて散歩に出て遅うなりました。ご心配かけてすみません」

と、まだ息弾んだ声で言った。

散歩の効用か、香代はいつもよりずっと食事が進んだ。たいてい残し気味になる肉料理も全部平らげた。さっと脂ぬきした薄切りの牛肉を細かく刻み、小さくちぎったレタスの上に載せ、薄切りのトマトが添えられていた。さっぱりしたドレッシングが、食欲をそそり美味しかった。薄味のクリームスープ、ほうれん草のごま和え、ふりかけ付きの御飯、刻んだ香の物、みんな躰に吸い込まれて一気に血流が高まるような気さえした。

久々の心地よい満腹感に浸り、香代は蓬や芹の新芽にもらった嬉しさを、みんなにも分けたくなってその様子をしゃべった。笑顔で頷いていたテーブルメンバーたちも、それぞれに思いがあるらしく、今は昔のことになってしまった草餅のことを話し始めた。

「家にいたら、蓬餅でもこさえるのにのう」

「でも、蓬を摘んでも昔のようには、だれも喜んでくれんでしょうが」

「ちょっと車で行って、スーパーで買ってくればいつでも蓬餅が食べられるご時世じゃもんね。何でも若い者向きのご馳走ばっかし」

「ここで、年寄りの口に合う物を、のんびりといただけるんは、ほんまに有難い」

愚痴っぽくなったり寂しそうな口振りになったり、高揚していた気分とは少しずれたけれど、みんなの話の一つひとつに、香代も大きく相槌を打っていた。

早めに食事を済ませた隣のテーブルの珠恵が、香代たちの話を聞いていたらしく、

「わたしも今朝、いっとき窓から田圃や畦道を見て、草餅のことを考えとったんよ」

と、香代の肩を軽く叩きながら言い、自分の椅子を引き寄せて来た。

食後ときどき、こうしておもしろい話題のあるところへ椅子を寄せ合って、みんなでおしゃべりをすることがある。十人十色で身の上もさまざま、それにまだ半年ばかりで共通の話題がしきりというわけではない。お互い深く入り込まず、そのときどきの話題で和気藹々と食事をし、気が向けばおしゃべりもするといった雰囲気を、香代はとても気に入っている。

歯の悪い香代はここへ来たころ、時間をかけて食べられるので、全部は食べきれないまでも、おなかいっぱいの食事にありつけたような気がしたものだ。ここに来る前の数年は、

香代にとって食事は苦痛でしかなかったのである。
「さっさと片付けて寝んことにゃ、明日の仕事に差し支えるけん」
毎晩のように嫁がそう言って、茶碗や皿を壊すのではないかと思うほど、乱暴に食卓の上を片付け始める。
「ぼつぼつ片付けるけん、先に休んでくれ」
香代は、食べかけの茶碗を手に頼むのだ。
「お姑(かあ)さんは、眠れん眠れん言うて昼寝して、夜は大きな音でテレビを遅うまで見るけん、わたしらが寝不足で困っとるんよ」
香代は仕方なしに茶漬けにして流し込む。足腰の痛いのを我慢して、流しに寄りかかって作ったおかずもほとんど食べる時間がない。スーパーで買ってきた方がよっぽど旨い、と息子が言い、歯応えも味もない、と嫁が追い打ちを掛ける。疲れて仕事から帰る嫁の手助けになればと思って作るのだけれど、その気持ちは伝わらない。香代はここ何年も、足腰だけでなく、歯茎も弱って入れ歯をすると痛むし、耳も遠くなっている。骨粗鬆症や血圧の薬のほかに、眠る前に精神安定剤を常用するようになっていた。
このハウスの食事は、煮物も生野菜もいろいろあり、肉も魚も食べやすく調理が行き届いている。それに食事の時間がたっぷりある。何より、食卓に話し相手がいて笑い声もある。
「娯楽室で少し体を動かしたりご自慢の声でも出したり、いっとき楽しみませんか？」
珠恵を交えて、食後の茶を啜りながら草餅談義の続きを始めたとき、九十歳という最高齢の節子がみんなを促した。長々おしゃべりが続いていると、彼女はときどき運動をしようと誘うのだ。彼女は独りでも、娯楽室の畳の上でラジオ体操をしているとか、心身共に筋金入りで背筋をしゃきっと伸ばしている。
「六十代までは、一歳でも若い方が得な気がしてたけど、七十過ぎれば気力も体力も人それぞれ、気分のもちようでどうにでも変えられるもんですよ。さあ、行きましょうよ」
そう言ってみんなを誘う節子は、本当に七十代に見えてくるほど、若やいだ表情を見せしっかりした足取りである。
彼女は、東京に嫁いでいる娘の家族と長いこと同居していたが、孫のことに口を出し過ぎて煩がられ、アパートを借りるには高齢だし、弟の世話で故郷に舞い戻ったのだ、とさらっと語ったことがあった。香代には、そのときの節子がとても羨ましかった。自分のあの恥ずかしい生き地獄は、ひと様にはとうてい話せない。これが生さぬ仲の子しか育て得

なかった悲哀というものだろうか、と寂しかった。

香代は三十一歳で、十二と九つの息子と娘の母親になった。男という男がすべてあの戦争に奪われたので、婚期を逸した娘の一人だったと言えば同情の声もあろうが、香代はそんなことは言えないと思っている。百姓仕事が好きになれず、女学校を出てすぐ村を飛び出してから、ずっと広島市内の病院で看護婦をしていた。その間に意中の男性(ひと)は、太平洋戦争に呑まれ海神(わだつみ)となった。何も約束していた訳ではないが、結婚は彼女の心の中から遠のいていたのだ。

終戦の年の七月末、父親が脳溢血で急逝し、休暇をもらって帰っていて原爆には遭わずにすんだ。が、香代はこのとき、決して幸運だったなどとは思えなかった。その病院は、爆心地の近くだったので、院長とその家族や同僚のみんなが、あの一瞬の閃光に灼かれ黒い雨に叩かれて、その亡骸にさえ会えなかった。意中の彼を失い父を葬(おく)った矢先に、またしても長く生活を共にした人たちのすべてを亡くしてしまったのである。あの戦争末期の日本では、多かれ少なかれ誰もが身近な人との別れを余儀なくされていた。とはいえ、香代はそう簡単には立ち直れず、ただただ悲しみと惨めさに明け暮れた一夏だった。

しかし父に先立たれた母が、結婚前の息子に中学生と小学生の娘を抱えており、香代に身を固めてその支えなれと、親戚から縁談が持ちかけられた。結局、縁あってその年の秋口、実家からほど近い村内の農家の後妻に入ったのである。しばらくは慣れない百姓仕事に、体中が砕けるように痛かった。ただ結婚した相手が、七歳年上のとても温厚な人柄で、仕事中によく労りの言葉を掛け、きつい仕事はできるだけ自分でやり、香代の負担を減らそうと気遣ってくれるので身も心も救われた。

間もなく実子にも恵まれたが、二歳の冬に流行ったインフルエンザで、喪(うしな)ったのである。かつて看護婦だった香代は、わが子を救えなかった衝撃にしばし打ちのめされていた。が、上の二人は生さぬ仲とはいえ、優しい心根をもっており順調に育ち、香代を気遣う彼らの愛らしさに癒されていった。そして、すっかり農家の嫁になった。

やがて娘は嫁ぎ息子に嫁が来て、どちらの孫もよく懐いたので、香代は何の不安もなく息子の元で一生を終えるのだと、ずっと考えていた。

ところが、連れ合いが逝ってから気がつけば、息子はご無理ごもっともで嫁の言いなりである。生さぬ仲とはこういうことだったのだろうか、と思い知ったのだった。

家の改築だ、孫の車だとお金を出したときだけは、嫁の機嫌がいい。いつまでも大金があるわけではないから、野良仕事ができなくなってからは年金からの月々の生活費を増や

して渡した。もう纏まった金がないと言ったが最後、年金の通帳と印鑑まで取り上げられた。それでも収まらずに嫁は、コンピューターで定期預金もみんな調べてあるけんね、と数字の並んだ紙をちらつかせる。お姑さんも家族なら、わたしらが苦労して働いてるのを見れば、みな渡してやりたい思わんね、ほんまにケチよのう、と目をつり上げて言う。

病院へ行くにもタクシーを呼ばねばならないし、家の置き薬を飲んでも、嫁がきちんと代金を請求する状態では、すべて渡してしまったら生きていけない。年寄りの口に合う物を適当に見繕い、ときどき医者通いの車も出してくれて、棘ある言葉を聞かずに安穏な生活ができれば、すべて任せた方が楽に決まっている。が、どうしてこうなってしまったものか、原因も解決策も思い浮かばず、半世紀も暮らしたこの家での自分が粉々に潰れていくようで、香代はただ鬱ぎ込んでいた。心の支えになる家族がなければ、僅かな金を頼りにするしかない。「一日も早う迎えに来てつかあさい」と、朝に夕に灯明を上げて亡夫に頼む毎日。ついに、香代の胸中を「自殺」の文字が渦巻き始めたのである。

挙句の果てに嫁は、墓参に里へ出かけるとき車で迎えに来た弟の前で、なんぼでも逗留して足腰の様子を兄弟衆によう見てもらいんさい、とまで言い放った。弟妹に面倒を見てもらえということなのか。働けなくなった身が哀しくて、車の中で涙が止まらなかった。弟は運転しながら前を向いたまま、

「心配せんでもいい、わしや妹たちもおるけん。コンピューターなんか持ち出して脅すなんぞ最低じゃが。本人以外に金融機関がそんな情報を流すはずがない、そりゃあ犯罪じゃけんのう。あんな情け知らずの夫婦にやられて、へこたれんさんな」

と、大きな声で怒鳴っていた。

結局、憔悴しきった香代を見かねた弟妹たちが、入居に必要な蓄えが残っている間にと、骨折って運良くこの「しおん」に落ち着けたのだった。が、その入居の話し合いの中で、また息子は、香代や弟妹たちの心をとことん踏みにじったのである。

「お父さんが死んだ後、戸籍ゅう調べたんよ。わしとお継母さんは養子縁組をしとらん。兄弟衆が何もかも取ろう思うとってんじゃろうのう」

違う、それは違うよ。香代はやっとそれだけ声を上げた。連れ合いの死後、香代名義で遺してくれた貯金以外は、預貯金・株券・不動産など家督を息子が引き継ぎ、貯金の一部を娘に渡してすべて決着したと思っていた。半世紀前の入籍のことなど思いも及ばなかった。香代は思いがけない息子の言い分に、連れ合い任せだった迂闊さに初めて気づいた。が、憔悴しきった香代の頭では、今さらどうすればよいのか考えることすらできず、ただ

茫然と息子を見つめていた。驚いた妹が、あきれ顔で、
「そんなこと！　姉が死んだわけじゃない、すぐに養子縁組をしてください。一円の金も山の木一本もいりません。今ここで、すべて放棄します。私たちは、あなたたちのほんの少しの優しさが欲しいだけです」
「今さら養子縁組なんか、格好悪うて。民生委員もしたし、農業委員もして役場に出入りしとるのに、恥ずかしいわいの」
即座に息子が言った。この夫婦は世間体を繕うことに、いつも必死なのである。そんなことで、せっかく調べた戸籍のことも言い出せずにいたのだろうか。香代の連れ合いが永年村議を勤め、香代も長く婦人会長をしていたので、息子にも民生委員の役が回ってきたものの一期だけに終わり、彼らにとっては、それも不本意なことだっただろう。
結局、ケアハウス入居問題は、香代が権利・財産のすべてを、息子夫婦に譲る旨の遺言書を認めて決着したのだった。
節子は、最近こんなことも言った。「葬儀も法事もいらない。母は元気に彼岸へと旅立ちました、の通知だけでいい。今はもう、それだけが私の願いのすべて」だと。病を抱える香代から見れば、これまた羨ましい限りである。心身共に健やかで、最期の瞬間にたどり着ければこの上はない。香代は、骨粗鬆症からは逃れられないにしても、せめて恨みつらみを流して穏やかな気持ちを取り戻して最期を迎えたい、切実にそう思った。
娯楽室に初めて集まったとき、誰かが懐かしい唱歌を口ずさむと、つられてみんな声を揃えた。歌を歌うと気持ちが晴れる、と口々に言い、だれもが清々した表情を見せていた。
「しおん大正琴同好会」も、そんな気持ちの延長線上のものであろう。
「しおん」は、静かなアパートの雰囲気で、頻繁に集うわけではない。昼食後、比較的元気な人たちは散歩や買い物に出かけ、決まって昼寝をしなければ、と言う人はそれぞれの部屋に引き上げて寛ぐのだ。たまに、節子がこうして声を掛けるくらいで、顔ぶれもそのときどきで、みんな気楽につき合っている。この日は四、五人が娯楽室へと移った。
香代は体を動かすといっても、みんなと同じようにはできないが、そろそろとシルバーカーでみんなの後に続いた。何とも厄介な病気になったことを、ちょっと恨めしく思いながらも、新芽たちとの昔語りで、心地よい気持ちの高ぶりがまだ残っていたのだ。
香代が舌を噛みそうなこの病名を聞かされたのは、古希を迎えて間もないころだった。ちょうど一年余り、連れ合いが肺ガンを患って亡くなったころで、看病疲れを癒そうと久しぶりにゆっくり風呂に入った後、大鏡に映っている姿を見て思わず振り返った。香代以

外には誰もいない。でも、しわしわになったちんまりした顔は、疾うに亡くなった実家の祖母であり、もっと驚いたのは両足が酷く曲がって、俵の一つも挟んだようなO脚をしているのだ。慌ただしく過ごした看病の一年あまり、わが躰をまじまじと見る気にもなれずその暇もなかった。その間に七十の坂を急速に滑り降りたのだろうか。俄には認め難い自分の姿に、一瞬、唖然とした。が、疲れからくる幻影や祖母の幽霊ではない証拠に、ちゃんと足が付いているし、香代が手を上げれば手を上げ、嫌々をすればその通りをするのだ。

とにかく現実を認めて検診を受けるしかない。翌日さっそく、病院の門をくぐった。すでに症状は進んでしまっていた。不治の病と言われても、寝たきりにはなりたくないと、気持ちを取り直してその後十数年、この病気と仲良くつき合ってきた。シルバーカーのお陰で、今も曲がりなりにこうして歩いている。

娯楽室でいっとき手足の屈伸をし、歌も歌ってお開きになったときだった。間もなく喜寿を迎えるという珠恵に、ひょいと節子が言った。

「あなたはお元気そうだから、まだ家でも何かと手助けができましょうに」

珠恵は、少しむっとした風だったが、

「どこの家にも事情がありますけん。息子はサラリーマン。孫が大きゅうなったら、人手より部屋数が欲しいんよね。金を出したときだけ、ちょっと機嫌が良うなる。その繰り返しじゃあ、将来が不安でたまらんかった。これが腹を痛めて産んで育てた子だろうかと情けのうて、とうとう、ほぼろを売ってしもうた。里はもう甥坊の時代じゃから、自立できとるうちに、このハウスへほぼろを売ったようなもん。弱ってからじゃ、どっこにも入れてもらえんでしょうが」

と、一気にしゃべり、ふうっとため息をついた。香代も、一緒にため息を漏らした。

「それぞれ事情がある。つまらんことを言うてごめんなさいねえ」と、さすがの節子も、いつもより声を潜めて謝り、なおもぼそっと言った。「ほぼろを売るですか、なるほど」

そのとき香代が、急に活気づいて、

「今朝の散歩の途中で、蓬や芹を見ながら、ほぼろの話を思い出しとったんですよ」

と、口を切り、新芽たちに話した、妹の半世紀ぶりの快挙話をにこにこと披露した。

「まあ、そういうことじゃったんね」

「四目行って竹しべを返す、ヨメ行って帰る。まこと面白い思いつきじゃが」

「何げのう使うとったけど、仕事の合間の楽しいおしゃべりから生まれたんじゃのう」

みんな納得の笑みを浮かべて頷き、珠恵も穏やかな表情に戻っていた。

生さぬ仲の息子をもった香代の場合は、珠恵よりずっと分が悪くて当然だったかもしれない。が、このハウスへ移ってからも都会に出ている娘や孫たちが、ときどき顔を見せに来るのでずいぶん救われている。香代は連れ合いには逝かれ、自分も病を得て不安になった心が、いつの間にか凝り固まって、息子夫婦との溝を深めた面もあったかもしれない。ふっとそう思い、とても穏やかな気持ちが蘇っている自分に気がついた。

香代は頷くように、二、三回首を振って、おもむろに言った。

「嫁がほぼろを売った昔とは逆の話じゃけど、人知れず山奥で独り旅立つより、ほぼろを売るところがあって幸せじゃ思えば、元気も出ますのう」

（了）